

■■■ 盆踊りと盆狂言 ■■■

< I >

前に言った信玄の千人塚から、山一つ東に越えた村内の大字出沢は、^{すざわ} 界隈での狂言所の一つであった。氏神は一に八平神社と^{はちへい} 言って、社殿は拝殿すなわち狂言舞台の陰に隠れていて、外部からは窺われぬくらいで、まさに拝殿舞台の典型的なものである。同所では例年祭典狂言の他に、盆狂言も行われていた。しかしその場所は、地内の観音堂であった。

なお出沢に限らずこの地方の村々には、必ず堂と呼ぶ念仏堂があり、狂言を初め盆踊り等も、多くそこに中心をおいていたのである。

出沢の盆狂言の次第は極めて簡単で、稽古こそ行ったが、芸題等も多く問題とせぬ、いわゆる茶番の類であった。狂言のあったのは近世では一六日だけで、その前の一四、一五の両日夜は「放歌」があり、一四日夜は別に地内の万燈山に、各戸から若者が松火を持って集まり、頂上を境に東西の組に分れて、松火を焚くことがあった。その松火の火の手が、遠くから望むとあたかも箕の手に似ていたところから、一に箕の手万燈とも言ったのである。すなわちこの一四日の松火焚きから、盆踊り、盆狂言へかけて一続きに行われていたのである。なお一四日の松火焚きには、逸早く火を松火に移し終わった組がその年幸運だとして、火掛りを互いに競う風があった。その間、鉦と太鼓の拍子で、

やあれもせ やれもうせ。 とおぼいた とおぼいた
と大声に謡い、かつ踊り狂ったのである。そうして火が全部に掛かると、先を争って山を降った。そのさい新仏のある家のものは、松火を特に大きく、直径一尺、長さ三尺くらいに作ったのである。

この地方には、盆または六月一五日（一に祇園祭り）に、山に登って松火すなわち万燈を焚く風習があつて、万燈山と称する地名はほとんどどこにもあつたが、その中でもっとも盛大であつたのが、今言った出沢と、出沢からはるかに東南方に当る八名郡舟着村大字市川〔現、新城市〕であつた。市川の万燈を一に鍋弦と言つて、豊川の流れを挟んで、東と西に箕の手と鍋弦の形を互いに競つたのである。

< II >

盆踊りの一つとして、もっとも盛んに行われていたのは、前にも言った「放歌」

である。「放歌」は法歌、または宝歌等の文字が充てられていたが、放下僧一派から来た名称で、一種の念仏踊りと考えられるが、盆の一四日または一五日夜に、新仏のある屋敷を中心に行うもので、一に念仏踊りとも言った。六尺に三尺ほどもある団扇、またはこれに五色の切下げを付けたものを背負い、胸に大太鼓を吊るした踊子が、三人または五人あるいは七人など一組となり、花笠を被り襷を掛け、笛太鼓の拍子で、縦列または横列となり踊るもので、その中心は五彩の万燈であるが、これを別に「おさいちょう」とも言った。そして多く列後におんべ（御幣）を負い、「ささら」を持ったものが続いた。初め寺院または観音堂で勢揃いして、新仏の屋敷へ繰り込むのであるが、その前に地内の親方屋敷または古塚由緒ある祠等へ繰り込んで、まずひとくさり奉納する習いであったことは、前言った長篠舞台の「やすら」様の塚におけると同じであった。

そして新仏の屋敷では、門に百八の松火を焚いて迎えたのである。一回踊りが終わると、団扇を下して振舞いを受け、後はお茶菓子ともまた「おひねり」とも言って装束等を替え、手拍子足拍子で踊るのである。

「放歌」の一方には大念仏があった。寺または観音堂に集まっていわゆる百万遍の念仏を唱え、それから万燈を先に立てて、鉦太鼓で念仏和讃を唱えながら、新仏の屋敷を巡るのであるが、これは放歌と混同していた事実もある。放歌、大念仏とは別に、掛踊りというのもあった。その他、前言ったお茶菓子すなわち余興式のものには、小踊り、手踊り、端踊り等の区別があり、これには十七（十六ともいう）岡崎、のと、おさま甚句、しょんがえ、せしょ、おんど等も行われていた。

<Ⅲ>

盆踊りを村々についてその異同特色等を言ったのでは、徒らに煩瑣に堪えぬから、各所概括的に次第を言ってみると、これが日時においても、かならずしも精霊迎えまたは送りの一三日とか一五日等に限ることはなかった。したがって七月に、入れば開始するというのが、古くから一般の仕来りであるらしく、現にこれを言っておる土地も北設楽郡の各所にある。行事の開始はいずれも稽古初めであるが、これをこうぬし（神主）念仏またはぢねんぶつ（地念仏）とも言っていて、「こうぬし」を祀る祠か、または氏神で行うのである。そして行事の開始もまず氏神において行う土地が多い。これについては、対氏神観念の変遷を言う必要があるが、それはしばらく後にすることとする。

たとえば北設楽郡でも古戸等は、七月九日が「こうぬし」念仏であるが、一方本郷町の字中在家、三ッ瀬等は、七月五日ないし七日で、この日に氏神の道作りをなし、地念仏があり、続いて夜は踊りの稽古に取り掛った。また古戸では一日が八幡社すなわち氏神の掛踊りであって、地内七組から各代表の少年が出て、万燈を中心に笛鉦の拍子で、踊子は花笠を被り、手に小形の太鼓を持って勤める。一四日夜を夜念仏とも言って、これは新仏に対するものとして、村の晋光寺の本堂雨下垂れに精霊棚を設け、地内の新仏の位牌をことごとく祀り、ひとわたり若者の儀式の踊りがあり、それがすんで、一般のいわゆる手踊りがあった。踊子は若い男子を中心に、老幼ことごとく集まって、他地へ縁づいたものも、この日はかならず帰って来て、踊りの群れに加わるのが古くからの習慣となっていた。かくして一五日、一六日と続けて、一七日朝に至って精霊送りをする。この精霊送りの日においても各所まちまちで、かならずしも一五日または一六日朝と限ってはいなかった。

ちなみに「放歌」にしても「大念仏」にしても、踊掛りは、いずれも庭誉めから始めて、最後は「しずめ」の踊りを行ったのである。

<IV>

前に言った事実からみても、この地方の盆踊りが、新仏に対する供養慰霊に限られていなかったことはわかる。すなわち新仏から、特種の亡魂の鎮ると信じた塚なり祠から、ひいて神社へと、その対照の及ぶところが繋がっていたのである。

一方その形式にしても、門誉め、庭誉め、宮誉め等から始めて、「しずめ」の踊りに終わるころ、神社の祭りに比較して何の変わるころはない。したがって亡霊供養の意味で、他の形式のものが選ばれていても何の不思議もない。これが念仏または「放歌」の形式から脱化して、狂言として行われていたものが、村々の盆狂言であったと言える。しかも亡霊から神社を対照する上においてもっとも代表的なものが、前々から再三引合いに出た鳳来寺山麓門谷の盆狂言で、明治初年に中絶したが、その次第はほぼわかっている。門谷の盆狂言は、さすが狂言の本場だけに、その次第等もはるかに手の込んだもので、他の場合の祭典狂言と変わるころはなかった。日時は盆の一六日一日で、衣装、振付け等も、この場合だけは他から雇い入れる等のことはなかった。衣装は全部山内熊野三社権現の宝蔵に準備されたものを用い、振付けは村内老朽のものが当たった。ちなみに熊野三社権現の宝蔵には、明治初

年焼失前までは、衣装、小道具の類が夥しく用意されているのである。

舞台は前にもちょっと言った通り、中の舞台すなわち村の十王堂で、幕摺は六間あり、現在、長篠村字横山〔現、鳳来町〕の氏神の舞台がそれである。正面奥の上段に十王像を祀り、左右両脇には何の由来か山伏姿の天狗の像があり、「しょうづか」の像には、亡くなった子供の衣類などが、夥しく引っ掛けてあったという。これらの像は舞台取払い後、いったん地内の寺院に移して、現在そこに祀ってあるから充分当時の状況を想像することができる。

なおこの盆狂言には、別にお伊勢の山と称する四台の傘鉾が出て、役者、囃子方、世話人一同、その後から行列を作っていったん山内に登り、芸大一通りの狂言をひとわたり内陣に向かって行い、終わると衣装等もそのまま山を降って、初めて十王堂の舞台へ現れたのである。すなわち同一日に、社殿の行事と、十王堂の行事とを繰り返したわけである。ちなみに鳳来寺は、本尊仏薬師如来で、熊野三社権現は一山の鎮守として祀られてあったもので、狂言の行われたのは、薬師如来の本堂であった。

今その次第を一通り言ってみると、当日朝、門谷地内四組のものは、舞台前の広場に参集して、まず鉾を組立てる。鉾は円と角の二種で、これに犬山、百足山、鶯山、松山の四台があり、犬山と鶯山が角、百足山と松山が円鉾であった。犬山には鉾の先端に犬を飾り、その他は百足、鶯を飾り、松山は姫子松で、鶯山は一に桜山とも言い、桜の造花であった。一説には古くは鉾は三台で、犬山、桜山、松山で、桜山に鶯、百足は別に箱に納めて舁いだとも言う。

以上のうち下の組から出た犬山を最も重大として、普通の大きさの白犬を鉾の上に飾って、胴中を鉾の柄の青竹で突き通してあった。そして犬には白羽二重の衣装を着せ、金糸模様の帯を締めさせ、左の後肢には、木綿の白足袋が履かせてあった。

この犬は祭日以外は、同所字下組の渥美宇之助方に祀ってあった。渥美氏の宅は、門谷の草分けと称せられる旧家であったが、言い伝えによると、犬は昔この家に飼育されていた。鳳来寺の開祖利修仙人が、煙巖山の洞窟に修法中、時の帝文武天皇の勅使として、草鹿砥公宣卿と申す方が下向の折、山中にて道に迷い難儀のところ、袖を啜えて道案内をした由緒ある犬という。またその後肢に足袋を履かせた理由は、ある年の正月一六日朝、この家で小豆粥を煮て、鍋のまま土間に下ろしておいたのを、犬があやまってその中に肢を踏み込んで火傷したためという。それ以来渥美方では、地類二軒とともに、一六日の小豆粥は決してつくらなかった。また白羽二重

の衣装と帯は、三年あるいは五年目ごとに、渥美一系で新調して着せたと言うが、最後のものが帯だけ大切に蔵ってある。犬ももちろん奥の間に祀ってあって、数年前無理に乞うて実見したことがある。首の部分は木彫で白布を張り、胴は籠張りになって、上をやはり白木綿で張ったものであった。同家ではこれを家の守護神といい、見た目はまことに粗末なものであるが、ふだんこれに対するにも鄭重を極めていて、私が一覧を乞うた際にも、老婆がまず家中の戸締りをして、奥の間から出してきたが、そのとき何やら犬に向かって承諾を乞う意味の言葉が漏れ聞こえた。

<五>

犬山を先登にした四つの鉾が出来上がると、十王堂すなわち舞台前へ、それを昇いで一同ならぶのであるが、このとき露払いとして梅の枝に短冊を結び下げたものを持った一人が立ち、次に犬山、百足山の順でならんで、後に役者と世話人が続いたのである。このとき囃子方が舞台を背にして、笛一、太鼓三、大胴一の都合五人席に着き、ひととおり囃子があって、露払いから左に円を描いて巡った。このとき囃子とともに次のような謡いがあった。

お伊勢の山の旅衣 今をはじめのたびごろも 身の行末ぞたのしけれ

謡いはただこれだけであった。なおこのとき巡るには、静かに練るのみでなく、歌の一節ごとに、いわゆる烏跳びに跳んだらしく、例えば謡いが「おいせのやま…」とやる間は静かに歩いていて、終わると同時に二、三回続けて跳ぶ。三回巡ってひとまず行事はすんだわけで、後は囃子方が先登を切って、街道に出で、町内を練って山内に登る。このときの服装等は格別改まったものを用いず、ただ紙緒の草履を履くくらいのことであった。

(註) この行事が、何のためのものか、また伝承の上から、どんな風に考えていたかを知るすべもないが、古老の感想を聞くと、当時子供心にこれを見物してただおかしかったそうだ。鉾を昇いだものが鹿爪らしい顔をして、謡いの終わりに烏跳びをやる恰好が、いかにも馬鹿馬鹿しく見えたという。

鉾を中心とした行列が、山内本堂へ到着すると、本堂ではあらかじめ外陣に畳を二重に敷いて、周りに浅黄幕を張り廻し用意が出来ていた。行列が外陣へ繰り込むと、囃子方が列を離れて脇の席に着き、ここで前と同じように、謡いがあって三巡する。囃子が最後の鼓を打って式が終わると、昇いでいた鉾を、向かって内陣正面にある賽物箱に立て掛け飾って一同が退下する。それと入れ代わって一山の僧侶が出

て読経がある。このとき役者は用意された座敷すなわち楽屋に入って、顔のこしらえ、衣装付けにかかる。読経がすむともう三番叟にかかったのである。

本堂内で演る狂言は、三番叟、あたけ三番（黒尉）で、その他の芸題はその年々の思いつきで別に定まっていなかったが、床、台本まで他の狂言と何の変わるころはなかった。その年の演し物一通りを、内陣に向かって幕無しで演ったので、一山の僧侶たちは、内陣から金網越しにこれを見物したのである。

なおこのときの鉾の処分であるが、狂言開始と同時に取り片付けたとも、あるいはそのままであったとも言い、いずれとも判別せぬ。なにぶん中絶して五〇年の久しい上に、記録と言っては、役割帳一つないのであるから、いかんとも致し方ない。

本堂における演出は、午後三時前後には終りになった。終ると同時に、役者は顔のこしらえのまま、その他床、小道具の連中まで急いで山を降る。そうして前言った十王堂の舞台へ出たのである。その頃には、見物がもうしびれを切らして待っていた。ここの舞台においてもまた、本堂と同じく三番叟で始まったことは言うまでもなく、違っているのは幕を引くことであった。